



Newspaper in Education

第10回海外NIE事情視察団報告書

NORWAY & FINLAND

(2008年8月24～31日)

日本新聞教育文化財団

日程

ITINERARY

8月24日(日) 東京 ヘルシンキ オスロ

11:00 成田発 = フィンランド航空(AY074)

15:20 ヘルシンキ着

17:55 ヘルシンキ発 = フィンランド航空(AY657)

18:25 オスロ着 トーン・ホテル・オペラ (Thon Hotel Opera) 泊

8月25日(月) オスロ

・ドラメンス・ティンダーダ紙 (Drammens Tidende)

同社のメディアラボを見学 / 同社で昼食会

・スモーレネス・アビス紙 (Smaalenes Avis)

8月26日(火) オスロ

・ソーバッケン (Sobakken) 小学校

・リリモエン (Lillemoen) 小学校

・オストランディングン紙 (Ostlendingen)

同社で昼食会

・オーモット・ウングダム (Amot ungdomsskole) 中学校

・Torshov gard 農場

・ヤン・ステーン氏との懇談夕食会

8月27日(水) オスロ ヘルシンキ

13:15 オスロ発 = フィンランド航空(AY656)

15:40 ヘルシンキ着 ラディソン SAS ロイヤルホテル (Radisson SAS Royal Hotel) 泊

8月28日(木) ヘルシンキ

・新聞博物館 (Päivälehti Museum)

フィンランド新聞協会

ヤングリーダー & N I E 部長ピリョーリタ・プロ (Pirjo-Riitta Puro) さんの講話

・ピステ (The Simulation Centre Piste)

・ヘルシンギン・サノマツ紙 (Helsingin Sanomat)

8月29日(金) ヘルシンキ

・ティックリラ (Tikkurilan) 高等学校

・マートゥッリ (Maatulli) 小学校

・ヘルシンキ市学校博物館

8月30日(土) ヘルシンキ 東京

17:20 ヘルシンキ発 = フィンランド航空(AY073)

8月31日(日) 東京

8:55 東京(成田)着 成田空港第2ターミナルで解散

参加者

Participants

= 団長、敬称略

教 員 16人

山 形	西川町立西川中学校	東海林	み 系
群 馬	太田市立生品中学校	松 橋	美智子
埼 玉	さいたま市立馬宮中学校	小谷野	弘 子
神奈川	横須賀市立鴨居小学校	白 井	淑 子
”	藤沢市立大庭中学校	有 馬	進 一
”	相模原市立鶴野森中学校	村 山	正 子
静 岡	浜松市立船越小学校	山 崎	章 成
長 野	長野県松本筑摩高等学校	有 賀	久 雄
大 阪	大阪市立野中小学校	安 田	陽 子
”	大阪市立昭和中学校	植 田	恭 子
奈 良	奈良県立桜井高等学校	矢 野	佳 津
岡 山	倉敷市立倉敷西小学校	廣 田	巨 史
”	倉敷市立倉敷第一中学校	横 田	眞智子
”	岡山県立西大寺高等学校	水 田	清 志
山 口	山陽小野田市立高千帆中学校	川 本	吉 治
徳 島	美馬市立芝坂小学校	上 田	正 純

新聞関係者 5人

朝日新聞社	N I E 専任スタッフ兼文化グループ記者	木 元	俊 宏
読売新聞社	編集局N I E 事務局長	高 野	義 雄
共同通信社	編集局文化部記者	中 村	彰
信濃毎日新聞社	編集局報道部記者	上 野	啓 祐
日本新聞教育文化財団	N I E 部長	吉 澤	正 一

視察先アレンジ

ヤン・ステーン (Jan Steen)
フィンランド新聞協会ヤングリーダー & N I E 部長
ピリョーリタ・プロ (Pirjo-Riitta Puro)

通訳

守口 恵子 (ノルウェー)
ペトリ・ニエメラ (フィンランド)

以 上

目次

CONTENTS

日 程.....	2
参加者.....	3
【ノルウェー】	
ドラメンス・ティンダーダ紙	
西川町立西川中学校 教諭 東海林みゑ.....	5
マルチメディア・ジャーナリストの視点から	
相模原市立鵜野森中学校 教諭 村山 正子.....	7
スモーレネス・アピース紙	
太田市立生品中学校 教諭 松橋美智子.....	8
「場」からはじまる	
大阪市立昭和中学校 教諭 植田 恭子.....	10
ソーバッケン小学校児童のオスランディンケン紙への紙面参加	
横須賀市立鴨居小学校 教諭 臼井 淑子.....	11
リリモエン小学校	
浜松市立船越小学校 教諭 山崎 章成.....	12
オスランディンゲン紙	
さいたま市立馬宮中学校 教諭 小谷野弘子.....	13
オーモット・ウンダム中学校	
倉敷市立倉敷第一中学校 教頭 横田真智子.....	14
オーモット・ウンダム中学校訪問記	
藤沢市立大庭中学校 教諭 有馬 進一.....	15
【フィンランド】	
新聞博物館	
美馬市立芝坂小学校 校長 上田 正純.....	16
ピステを訪問して	
山陽小野田市立高千帆中学校教諭 川本 吉治.....	17
ヘルシンギン・サノマット紙	
奈良県立桜井高等学校 教諭 矢野 佳津.....	18
フィンランドの高校「ティックリラ」	
長野県松本筑摩高等学校 教諭 有賀 久雄.....	19
マートゥッリ小学校の子どもたち	
岡山大学教職大学院（倉敷市立倉敷西小学校教諭）廣田 巨史.....	20
ヘルシンキ市立学校博物館見学	
岡山県立西大寺高校 教諭 水田 清志.....	21
第10回海外NIE事情視察団視察を終えて	
大阪市立野中小学校校長・視察団団長 安田 陽子.....	22

ドラメンス・ティンダーダ紙

西川町立西川中学校 養護教諭 東海林 みゑ

8月25日午前8時、私たちは通訳のヤン・ステーンさんとホテルロビーで合流した。ヤンさんは、日本を3回訪れたことがあり日本とはとても親密であると言った。NIEで25年もの長きに渡って仕事をされており、この2月に新しく会社を立ち上げられた。オスロでは若い読者の育成に力を入れており、特にジャーナリズム・ディストリビューション・マーケティングに重点を置いているということである。

私たちは、この海外事情視察の最初にノルウェー・オスロの南約50kmのところにあるドラメンス・ティンダーダ紙(約4万部)の施設メディアラボを訪問した。背の高いポニーテールの理知的な女性イングリッセ・ウーロンさんが私たちを温かく迎えてくれた。ここは、エクスプロジ社が運営する最新の機器を駆使した先端NIE施設である。



新学期が始まったばかりのこの日、近くの高校1年生約30人がやってきた(写真)。4チームに分かれて、各自が携帯端末を持って室内の各所で情報を集める。そして、それらの情報をチームで協力してまとめて、記事に書き上げるというものである。

まず、「何をフォーカスするか」ということが大きな着眼点になるとウーロンさんは説いた。不確かな情報に惑わされると事実を見誤る。特に求められるのは、事実確認を複数の情報源から行う重要性を体験することである。教員体験のあるアドバイザーが生徒たちに行動を指示し、取材に際して出てくる倫理的な問題についても十分に話し合いをし、深く考えさせるという仕組みである。

このメディアラボの小さな部屋が社会のミニチュアである。社会のどこに向かって情報を発信するか、ジャーナリストとはどんな仕事をやるのかを体験する。「実行することにより学ぶ」ということを目的とするこの施設では、どの生徒もジャーナリストの役に切り切り体験できるものである。このテクノロジーは、14歳から16歳そして若者や成人にも対応でき、個々、チームとして、クラスとして等どのような規模の集団にも対応できるようになっており、完成すると新聞・ウェブサイト・テレビにも実際にのせることができる。このようなメディアラボは、ノルウェーには6か所あり北欧全体では10か所ある。だいたい、どこもここによく似ている。

最後に、「みんなのリポーターの結果をみましょう」ということで、テレビのニュースの場面を見せてもらった。高校1年生の取材によって作られたとは思えないほどのものであった。



私は、このメディアラボでの学びに強い関心を持った。このような体験を通して訓練することがなければ、迅速にかつ事実を正確にくみ取る力はつかない。事実を正しくくみ取ることの大切さや、限られた時間の中で活字に表現することを学ぶこの手法は、今後の実践に大きく役立つものであると確信した。そして、日本でもこのような生徒自らが進んで学習

に取り組む学習スタイルへの転換が求められると痛感した。

地域の新聞社と積極的かつ密接にかかわることの学びを、今後のNIE活動の実践に生かしたい。ジャーナリストに関心を持った子どもが増えることは、活字離れの進む日本においてもこの実態を変えるための有効なきっかけになると思う。

ヤン・ステーン氏は、NIEの目的は「批判的な視点を持つ読者(critical reader)を育てる」こと、また「進んで読む読者(active reader)を育てる」ことであると話した。そして、これを推し進めていくには、「今を基盤に物事を考えさせることが必要」であり、紙面を通じて「現在起こっていることを知り、そこからインスピレーションを得る」ことで、ますます「その背景が知りたくなる」「もっと読みたい」というさまざまな可能性を秘めた読者が誕生するのである。それには「今に興味を持たせることが絶対必要である」と説かれている。(とうかいりん・みえ)



NORWAY



スモーレネス・アピース紙にて



リリモエン小学校にて

「マルチメディア・ジャーナリストの視点から」

相模原市立鷺野森中学校 教諭 村山 正子

ドラメンス・ティンダーダ紙は、オスロ近郊の地方紙（発行部数約4万部）である。ここは、紙媒体の新聞紙だけでなく、インターネット、ラジオ、テレビなどを扱い、それらが一つの建物の中に入っている。マルチメディアハウスと呼ばれていて、その面でノルウェーでは主導的な立場にあるとのことである。



入口には、新聞ラジオテレビの名前が並ぶ

説明に当たったデジタルメディア部門の担当者は「それぞれに競争するのではなく協力し合ってメディアの特性に合わせた報道を行っている。ネットには何を載せて新聞にはどのように、というように、それぞれの部門が会議で話し合って決めていく。協力関係がよりよいニュースを作り出し、オスロなど他の地方との競争にも勝てるようになる」と話す。

最近では、インターネットでは写真などを多く使い、読者との対話を心がけているそうである。若い読者は新聞紙より他のメディア（インターネットやモバイル端末など）から情報を得ようとする傾向もあるが、いろいろな可能性に対応できるような経営をしようと考えているとのこと。若い読者を意識することが、次に紹介するメディアラボの運営にも結びついているようである。

ドラメンス・ティンダーダのメディアラボでは高校生30人程度が四つのグループに分かれて、ロールプレイングゲームを行っていた。携帯端末を使って取材し、記事を書いていく。



携帯から情報を得る

記事を書くには、いくつかの情報を照らし合わせて確認したり、質問の仕方を考えて情報を引き出したり、写真や名前をどういう場合に載せるかを考えるなど、正しい対応の仕方が必要になってくる。また、限られた時間の中で競争することで、より現実的な体験をする。

メディアラボの担当者は「出来上がってから、どうしてこのような編集にしたのかを質問したり議論したりする。新聞・ウェブサイト・テレビ・ラジオ、などメディアタイプの特質を考え、それに合わせて編集していくので、まさにマルチメディア・ジャーナリストとしての体験である」と語っていた。

メディアの倫理についても深く言及していて、生きた経験として身につけていくことだろうと感じた。ジャーナリストとしての面白さや充実感を持つことができ、このあと、メディアに対する興味が深まることは確実である。

1日に2、3組で週4日の運営。北欧にはこのような施設が10か所あるとのこと。若い読者を育てることへの力の入れ方を、肌で感じた思いであった。（むらやま・まさこ）

ノルウェーの日刊新聞社の発行部数

VG-Verdens Gang, Oslo	309,610	(前年比 1.9%)
Aftenposten, Oslo	250,179	(同 0.7%)
Dagbladet, Oslo	135,611	(同 7.4%)

Drammens Tidende, Drammen

40,954 (同 3.2%)

「ノルウェーデータ2008」(ノルウェー外務省)より

スモーレネス・アビース紙

太田市立生品中学校教諭 松橋 美智子

概要 ヤーレ・ベンセン理事・管理部長

スモーレネス・アビース紙は、1899年に県内三つの新聞社が合併してスタート。かつて同紙の所在地であるアッシムは「アッシムと言えばタイヤ」と言われるほど地域産業の発展に寄与してきたタイヤ工場が、1991年に撤退。工場は廃屋と化したか、「地域発展に寄与した建物」として維持保存する形で内部を改装し、2002年から同紙が活用している。



会社のシンボルが描かれた壁面

この会社のシンボルは「ミケランジェロの創造」を意識した「手（指）のデザイン」（芸術大学の学生が製作）で、壁面等、さまざまなところに掲げ有効活用している（写真）。新聞は約1万3千部を週6日発行。ノルウェーでは中規模の新聞社であるが、他にも週1回の新聞1紙、週3回3紙、週5回1紙を傘下におさめており、各紙とも三つのメディア（紙面・インターネット・携帯）で提供している。

企画会議は「短く、効率的に」を心がけ、脚の長いテーブルを囲んで立ったまま行う。壁面には、インターネット紙面や各種の「統計」（携帯のアクセス数等）が表示され、読者の動向をとらえている。

ヤング面担当 レイビン・リー記者、クリスティーン記者

「今まで焦点があてられなかったが、将来的に重要な年代」である15～20歳をターゲットとし、昨年度から同年齢の若者をヤングジャーナリストとして起用。毎週金曜日、大人では踏み込めない分野・内容・話題について「若者の視点」でとらえた記事を7ページ掲載している。

当初、ジャーナリストの募集は地元ミーセン高校（専門学校）の協力で行ったが、授業の一環ではなく、よりリアルな関係（報酬2ページの記事で750ノルウェークローネ）とするため、新聞社から直接メールで呼びかけた。その結果、複数校からジャーナリズムに関心のある生徒が集まった。狙い通り、若者読者からはポジティブな内容が寄せられるが、年代の違う読者からは「何を言っているのか分からない」という批判の声が寄せられることもある。現在、若者読者に近づく試みとして、「この一週間の学校の試み」というNIEにかかわる新しい企画が始動しはじめている。

ヤング面は、他の紙面と同じルールでガイドラインを設けており、担当記者は、記事の信頼性や妥当性をチェックするだけでなく、コーチ兼アドバイザーとして活動している。

ヤングジャーナリストのリーダー役 アッシム高校1年生シーリーさん（16）



取材中のシーリーさん（左）

記事担当の割り振りや記事内容と写真の吟味、ガイドラインに添っているかのチェック等、アシスタントと共に仕事をこなしている。

編集会議は、週1回月曜の午後4時30分からで、「デッドラインの月曜の夜はいつも心配ごとが出てくるが、金曜日には紙面を見てほっとする。活動は放課後なので、学校の勉強との両立を図るため疲れるが、このプロジェクトに参加するようになり、レポートの書き方に慣れたし、視野が広がり多角的に見られるようになった」と語っていた。

感想

スモーレネス・アビース紙は、「新聞をよく使う生徒は学業成績も良く、大人になってからも新聞を良く読む。つまり、ベタースチューデントがグッドリーダーになる」というリサーチ結果を正面から受けとめ、同紙のシンボル通り、次世代の読者「創造」に積極的に取り組んでいる。

また、新聞実務を通してジャーナリストたちの才能発掘や育成をしており、若者たちは新聞を通して、確実にたくましく「生きる力」を身につけていく。事情が異なり困難な点も多いが、日本でも将来を見据えた自国にあう実践が必要である。

(まつはし・みちこ)

【参考】<http://www.smaalenene.no/nyheter/article3741461.ece>

NORWAY



ヤン・ステーン氏のお兄さん宅を訪問

「場」からはじまる

大阪市立昭和中学校 教諭 植田 恭子

ものを生み出す場

1991年にタイヤ工場の廃屋をリメイクし、再生させた建物がスモーレネス・アビース紙の社屋でした。ゴムを溶かしてタイヤにするというものづくりの工場から、情報発信の場へとその姿を変えたわけです。町全体が経済構造の転換とともに、映画館がカルチャーセンターに様変わりするなど、さまざまな変化を余儀なくされていました。

しかしながら、彼らは決して過去の歩みを否定したのではありませんでした。過去から続く歴史を大切にしている精神は、かつてのタイヤ工場の仕事の足跡をしっかりと残していることから分かります。私たちは随所にタイヤの歴史を垣間見ることができましたが、自力でそれを発見できたかというところ全く自信がありません。それは説明を受けてはじめて分かることでした。

芸術を学ぶ学生の力を借りた内装は、光と風がふんだんに取り入れられ、センスのよさが際立つインテリアと融合し、モダンな空間が広がっていました。ゆとりと豊かさを感じられる場から、生み出される情報はどのようなものだろうという思いを抱きました。

「タイヤ工場」だったということが分かる名残の扉（というよりは社屋の中心部に、より存在感をもった「建物の顔」として「御座します」という感じでした）を、「あえて手垢のついたままを残した」という言葉にいたく感動し、扉の姿を何枚もデジカメに収めていたのは、私ひとりではありませんでした。

姿を変えた情報発信の場から生み出されるのは、三つのメディアからの情報です。週6回発行される新聞も、週1回発行の新聞も、いずれも「紙」「モバイル」「ネット」という三つのメディアで発信されていました。

ジャーナリストを育てる場

ひとを育てるといえるのは容易なことではありません。「口伝」「一子相伝」などの言葉が示すように、奥義はあまねくというわけにはいかない面もあるように思います。ジャーナリストの道もまたしかり。ジャーナリストを手塩にかけて育てるといえる試みを知りました。

スモーレネス・アビース紙では1990年代から若者のページを設け、ジャーナリストとして若い地元の学生を起用し、毎週金曜日に2ページを任せているそうです。学生のことですから紙面の質に関していえば、一定のレベルをいつも維持することは難しいという側面もあるようですが、「若者は若者が書いた記事を読みたがる」ので、試行錯誤を重ねながら今日のスタイルにたどり着いたそうです。

若者の編集リーダーから生の声を聞くことができました。1週間1回の編集会議を行い、進めていく大変な活動であるにもかかわらず、やりがいのある「とっても楽しい仕事」と編集のプロセスをにこやかに話してくれました。若者のジャーナリストたちは、論説をはじめひとつのテーマを15人に聞くなどのインタビューを行い、記事を書いています。「この一週間の学校の試み」という1年間のシリーズ記事にも挑戦しています。若者の記者は学校との協力関係を築きながらも活動はあくまでもパーソナルなものとして位置付けられており、報酬を受けています。学校生活との両立は大変なようですが、「デッドライン」との攻防を繰り返しながらも、続けているのは「いろいろな見方ができる」「視野が広がる」など得ることも多いようです。彼女らの活動が学校、社会からも認知され「誇り」をもって取り組める「場」であることも大きな要因のひとつだと感じました。

(うえだ・きょうこ)

ソーバッケン小学校児童のオスランディンケン紙への紙面参加

横須賀市立鴨居小学校 教諭 臼井 淑子

校長 トールド・アルネセン (Tord Arneson)
教諭 シェテル・ハウグ (Kjetil Haug)
児童 シーグル・ノールディ (Sigurd Nordby)
図書館司書トゥーリ エンダール (Turid Endal)

校長談 クンスカークレスト(日本の学習指導要領にあたるもの)に「知識の約束」とあるが、読書に力を入れるよう目標に掲げられている。また、長く教員を務めてきてNIEが大切と感じてきた。それは、新聞を使うことによって良い読者になれ、読み書きを通して、社会の一員になれるからである。本校は1～7年生まで児童数350人。他校も学校新聞に協力して作成している。

ハウグ先生談 教師として60%、ジャーナリストとして40%働いている。現在7年生と新聞づくりを担当している。三つの学校と製紙会社による共同プロジェクトとして2005年12月に第1号を発行して今年で4年目になる。初年度は年3回発行したが、現在は2回である。本校では7年生が参加し、児童は募集する。オスランディンケン紙の記者がまず新聞や新聞づくりの面白さを話し志気を高める。連絡は教師が取り、支援を受ける。週2回は児童による編集会議を開き、記事をワードで作成して新聞社へ送る。写真は記者の手助けももらうという流れで取り組む。印刷は印刷工場で行うので、それを見学に行きホカホカを手にするので感動が生まれる。広告・販売(1部=約400円)に児童がかかわり、その収入でカメラなど機材を購入。さらにホームページも作成している。



自信をもって語るシーグル君

シーグル君談 どうやって組み立てるか、かかわるかを学び、新聞でいろいろなことを学んだ。完成する喜びとともに、新聞にはこんな写真がよいということも気付く。もっとかかわっていきたい。音にも興味をもっていて、ラジオフィッシングもしている。プロジェクトでは新聞ネット、音響ラジオ、ポータルにインタビューの映像と音を紹介している。もともと読書は好きだったが、新聞をもっと興味深く読むようになった。

印象に残る質疑応答から 新聞にかかわる授業はジャーナリズムについての授業で主に取り組む。校長の賛同あつてのプロジェクトのスタートである、子どもは良い教師、プロとのかかわりで学ぶ。教師は専門家と連携して子どもの学べる環境を創り出す。校長は夢中になる教師を見つけ、その人に自由と時間を確保する、学校図書館には司書が常駐し、利用者が多い。司書はアドバイスやガイダンス、コーディネートを行う、子どものメディア接触はインターネットが多い。日本とノルウェーの子どもで新聞も作れるだろう、新聞は国(ノルウェー)・言葉・社会を学ぶことに通じる。シーグル少年を見て分かるように、新聞とかかわって彼はその生き方や可能性に広がりを得たといえる。

(うすい・すみこ)

【参考】<http://www.ostlendingen.no/article/20080827/NYHETER01/450982234/1108>



校長から説明を聞く視察団一行

リリモエン小学校

浜松市立船越小学校教諭 山崎 章成

7年生「英語」 英語の授業で、「日本に関する新聞記事」を書くことを単元の目標とし、私たち日本からの来校者に知りたいことを英語で質問する場面であった。子どもたちは、「日本では何歳から英語の勉強をするのか?」「宿題はあるのか?」「制服はあるのか?」など様々な質問をし、ワークシートにメモをとっていた。



英語で質問をする子ども

5年生「NIE」 新聞の中から「スポーツ」「好きな物」「笑顔」などのテーマに沿って記事や写真を切り抜き、ワークシートに張り、切り抜き新聞を作る活動をしていた。テーマと留意点はワークシート上部にあらかじめ書かれており、子どもたちは関心のあるテーマを選び、記事を集め切り抜いていた。記事や写真を再構成する面白さを味わいながら活動していた。



切り抜き新聞を作る子どもたち



日本のお客さんをパチリ

4年生「ランチタイム」 4年生はランチタイムの訪問

であった。学校からの牛乳と自宅からのランチボックスで思い思いの食事をしていた。子どもたちへの質問を許されたため、何度かやりとりをしているうちに「日本からのお客さんは珍しいから」と写真を撮られることになった。デジタルカメラは個人の物で、写真を撮影することに多くの子が慣れていているようであった。

感想 各学年の発達段階に応じて、NIEにどのように取り組んでいるかを垣間見ることができた。情報を収集し、整理・発信する情報活用能力全般を様々な場面で指導しているため、子どもたちが着実に力を付けているのを感じた。この学校が2005年に学校新聞全国コンクールで1位になったと言うのもうなずける。

NIE担当の教員が、「教師は意欲付けとアイデアに詰まった時のアドバイスが大切」学校新聞等、最後までやり遂げた時の感動は、何ものにもかえがたい感動がある」と話していた。

近隣の学校、新聞社、地元企業と協力して新聞社が印刷・発行・販売する「学校新聞」を年2回発行していると聞いた。日本では学校が紙面の1ページを単発的に編集することはあるが、継続的に数ページを担当する例はまれなので、参考になる試みといえよう。

(やまざき・あきなり)

ノルウェーでは3、6、10年生で新聞を使うようカリキュラムで定められている。新聞社は授業で新聞を活用するよう常に呼びかけている(ヤン・ステーン氏)。

オストランディングン紙

さいたま市立馬宮中学校 教諭 小谷野 弘子

ノルウェーの地方都市エルベルム（Elverum オスロから北へ1時間45分）にあるこの新聞社は、地域の小学校6校の児童が作成する本物の新聞「エルベルムス・ポステン（Elverums posten）」を発行している。この新聞社は、ノルウェー内陸部で一番大きい新聞社で、四つの地域に向けた週に6日発行の新聞、小さな一つの自治体だけをカバーする新聞、週に3回発行の新聞、週に1回発行の無料新聞などを発行している新聞の種類も一番多い新聞社である。また、「読者に親しまれる、政治家から少々うるさいと思われる」をモットーとして賞を獲得している。独自の印刷設備を持ち、発行部数は19,594部、1,000万ノルウェークローネ（NOK）の実益、6万人の読者を持つ（ノルウェーの人口は約470万人）。年間購読料は2,340NOK、1部20NOK（一部売りは800部）宅配率は95%。

新聞社が全面協力し発行している学校新聞について担当のグンナ・オストモ（Gunnar Oestmoe）副編集長は、この学校新聞プロジェクトは新聞社と学校が意識を持って取り組まないと成功しないと述べている。そのため、まず学校に出向き、新聞に対する意識を高めるため、教師の研修や子どもたちに向けて講演を行ったほか、本物の新聞として真剣に子どもたちの書いたものを扱ったという。それは、学校側にはプロとして、デッドライン（締め切り）を守るという新聞社のやり方を求め、新聞社側は子どもたちの書いたものを書き換えることはせず、純粋に子どもたちの新聞を作成するのである。

2005年に小学校3校が参加し始まったこのプロジェクトは現在小学校6校が参加し、年2回発行している。1校が5～6ページを担当し、広告も子どもたちが取ってくる。このタブロイド判の本物の新聞は駅の売店でも販売している。子どもたちにも5部ずつ配布され自分たちで販売の経験もする（1部20NOK）。得た収入の半分がプロジェクトに、半分は学校に還元される仕組みになっている。新聞社はこの新聞で収益は上げていない。

最近発行された新聞の主な内容としては、巻頭言がソーバッケン（Sobakken）小学校校長、女子ハンドボール地元出身キーパーへ北京オリンピックへの意気込みをインタビュー（北京で金メダルを獲得）職業人へのインタビュー（図書館30年勤務の司書・自動車洗車係・工場のスクラップを片付ける人）趣味の紹介、ギタリストの生徒紹介、子どもたちのダンスグループの紹介、子どものコックさん、低学年の児童のイラスト 等子どもたちの興味関心のある事項について、子どもたち自身の視点で作成されている。ジャーナリストと教師は全く異なる職業であるが、このプロジェクトで互いに分かり合い協力し合う関係が築かれ、一人ひとりの子どものさまざまなよい面を伸ばすという子どもたちの発達に貢献する効果が生まれたという。

どの国でも新聞離れの傾向が起きているが、このような取り組みにより、子どもたちが本物の新聞作りの楽しさやできるまでの過程を知ること、新聞に対する理解が深まり、親しみをもって新聞を読むようになると考えられる。新聞社と学校が協力し、若い人たちが新聞に近づく積極的な取り組みであった。（こやの・ひろこ）



オストランディングン紙 入口

新聞社の説明をする
シュッテルグランボ営業部長

オーモット・ウングダム中学校

倉敷市立倉敷第一中学校教頭 横田 真智子

学校の概要

ガイル・スベハーゲン校長先生から、学校の概要を聞いた。生徒数150人(7~10年生で13~16歳)、教員15人、アシスタント(教室で付く人)14人という規模。学校には80台のコンピュータがあり、学校にいる間、生徒は自由に使ってよいことになっている。メディアが盛んで、インターネット・ニューズペーパーをつくっている。新しい協力関係を結びたいと思い、海外に向けてパートナーを探している。実は今日も協力関係を結んでいるポーランドのポスヌンという所にある学校の校長先生など3人が、この場に同席している。

ヤン・ステーンさんが、「新聞になじむ 新聞をどうやって作るのかを知る 新聞作りに取り組む」という意図で数年前に立ち上げ、「ヤンの赤ちゃん」と呼ばれる『ザ・ユース・ペーパー』は、1か月にひとつの中学校が任されてニュースを書くが、この中学校では2001年以来、強く希望していつも12月を担当している。それは、この学校を有名にした「ノーベル・プロジェクト」のためである。担当は、アルネ・ヴェーガー・スェンさん。ヤンさんの話では、彼は「ネット新聞を上手に作って、助成金を受けることにたけている」とのこと。

「ノーベル・プロジェクト」

ノーベル平和賞プロジェクトについては、実際に体験した3人の中学生が発表してくれた。George Sekkebsten(男子)、Marto Sannes Sorensen(女子)、Maren Oline Nygard(女子)、全員14歳。

応募者の中から20人選ばれオスロに行く。ノーベル平和賞を取材し、世界的に有名な人たちに直接インタビューすることができる。最初中学生は入れてもらえなかったが、「平和の会なのに中学生を入れないでいいの。それを記事に書くよ」と訴え、その後入れてもらえるようになった。プレスカードをもらって、授賞式だけでなく、それにかかわるいろいろなセレモニーに参加し、取材する。存在を理解してもらって、とてもやりやすくなった。陰で支えてくれる人たちがいる 受賞者を生徒の方へ向けてくれたノーベル委員会のチェアマン、外務省の特別な女性、法務大臣。

2001年から2007年の間に、さまざまな人に会うことができた。ジミー・カーター、歴代の首相、今までのノーベル平和賞受賞者、ワンガリ・マータイ、シャロン・ストーン、アルバート・ゴア元米副大統領等々。国のメディアも関心を寄せ、2006年にはシャロン・ストーンへのインタビューのことがネット紙に取り上げられた。2007年にはゴア氏にインタビューした今回の発表者の男子中学生が、ノルウェー国営放送(NRK)のイブニングニュースにゲストとして招かれた。自分のことがニュースになっていてびっくりした、とのこと。なお、日本のテレビにもインタビューされたそうだ。



3人の中学生は、「本当にすばらしい学習の体験だ。楽しい。みんなに知ってもらって到達感を味わえた」「デッドラインをもって仕事をする人を尊敬する」「専門家のメディアの人たちに誉めてもらった。世界中のメディアの人に会えた」「英語の知識が増えた」「勇気を持って話をするようになった」「ぜひ、続けてやりたい!」と感想を語った。

(よこた・まちこ)

オーモット・ウングダム中学校訪問記

藤沢市立大庭中学校教諭 有馬 進一

はじめに

ノーベル平和賞の授賞式の様子を取材し、ウェブ上の新聞に配信することで知られる国際的な中学校は首都オスロの北約180kmの森の中にあった。学校長からの概要説明では、生徒は13～16歳の約150人、教師15人、アシスタント14人。小規模校ながらコンピュータは80台もあり、IT化が進んでいることがうかがえた。「海外に目を向け、パートナーを探している」とのことで、この日もポーランドから来年の打ち合わせに3人が来校していた。

続いて、日本へ2回来たことがあるというオーモットの市長は、トナカイやヤマネコ、そしてクマもいる自然をPR。また、ベルリンやロンドンから4時間の距離にあり、人口4,300人ながら専門大学もあり、居ながらにして国際社会の一員であることを実感できるハイテクの町であると締めくくった。

ノーベル・ピース・プライズ・プロジェクト

40人ほど入る階段教室で男女3人(全員14歳)がプレゼンテーションソフトを駆使して、2001年から毎年取り組んでいる「ノーベル・ピース・プライズ・プロジェクト」の活動の様子を紹介してくれた。学校の呼びかけに応募して選ばれた20人が2グループに分かれ、毎年12月にオスロ市庁舎で行われるノーベル平和賞の授賞式やピースコンサートなどのセレモニーを取材し、ビデオ撮影やその編集をしたりと、メンバー全員がプロジェクトに取り組んできた様子が見て取れた。

取材にはプレスカードの発行やノーベル平和賞の委員長などの特別な配慮がなければできないことであり、影で支えてくれた人たちの感謝の言葉もあった。ウェブ上のオフィシャルサイトへの掲載は、ノルウェー教育庁とNBL(ノルウェー・メディア・ビジネス協会)の援助で実施されている。担当者はマルチメディアの活用資金や子ども記者たちの取材活動費を捻出するために、スポンサーからの拠出金や各種の助成金を確保し、さらには市からも財政支援があると答えていた。森の中の小さな学校のスケールの大きなNIE活動は、支える大人たちの情熱があってこそ、それを可能にしていることが分かった。

なお、昨年のオスロでの取材活動の様子は、メンバー20名のブログに記されている。ノルウェー語の翻訳のため正確には理解することはできないが、生徒たちの興奮した息づかいを感じ取ることができることもあり、下記にアドレスを紹介しておきたい。

まとめ

このプログラムを通して、彼らが身につけたことは、「社会科学への関心が高まった」「英語の学習にとっても役立った」「勇気を持って話すことを学んだ」、さらには「(出稿には)デッドラインがあることを知り、ジャーナリストを尊敬する」とのコメントもあった。生徒たちにとって、将来に生きるインパクトのある体験であったことが随所に感じ取れるプレゼンテーションであった。(ありま・しんいち)

【参考】

http://72.14.235.104/translate_c?hl=ja&sl=no&u=http://avis.skolenettet.no/cgi-bin/skoleavis/imaker%3Fid%3D138176&prev=/search%3Fq%3Dungdomss%2Bavisa%26hl%3Dja%26rlz%3D1T4RNWN_ja___JP204&usg=ALkJrhg21Uz9LfOef14DelXSLH1DC4cBvA

<http://www.amot.gs.hm.no/eschola2003/>

新聞博物館

美馬市立芝坂小学校校長 上田 正純



ヘルシンキ市内の新聞博物館

2008年8月29日フィンランドの視察のトップはヘルシンキ市の新聞博物館であった。7年前に作られた、フィンランドでは唯一の新聞博物館で、ヘルシンギン・サノマット紙の歴史を中心に、フィンランドの新聞の歴史、新聞の果たした役割を学ぶことができる。

年間約5万人が訪れるが、来館者のうち20～30%が学校の生徒のグループ、近年は低年齢の生徒が増え、保育園の園児も訪れるようになってきた。文字が読めない子どもたちには、新聞についてよいイメージを持ってもらうよう努めているという。2008年はミッキーマウス生誕80周年ということで、訪問時、館内にはミッキーマウスの展示があった。博物館は、NIE指導者のためのワークショップや、教師と新聞社が協力してのNIEの教材作りにも活用されている。

はじめに、フィンランド新聞協会のピリョーリタ・プロさんから、フィンランドにおけるNIE活動の説明があった。説明の中に、PISA調査のあと、新聞を読む頻度と「読解力」の関係を調べた「フォローアップ調査」が行われ、よく新聞を読む生徒ほど読解力の得点が高いという結果が出たという話があった。また、テレビ番組（アニメ等）にすべて字幕がついていることが、子どもたちの読む力を伸ばしているという話もあり興味深く聞いた。



口を合わせるゲームの画面

プロさんの説明の後、サイラ・リンナ・ハールメさんの案内で館内の展示を見た。新聞によく登場した人物の写真から口の部分を取り除いて集め、その中からこの人物にはこの口と思うものをドラッグ・アンド・ドロップする。正解すると、人物が正しい情報を話し始める。間違えて、ロシア皇帝にレーニンの口を入れたりすると、大変怒るといったコンピューターのゲームがあった。子どもたちにとっても人気があるそ

うだ。館内には、小さな映画館もあった。新聞制作の工程を映画にしたものを見せるそうだが、この日はミッキーマウスのアニメをやっていた。その他、子どもたちが楽しみながら学べるようにいろいろな工夫がなされていた。

最後に、サイラ・リンナ・ハールメさんに「この博物館が、子どもたちに伝えたいことは何か」という質問があった。氏の答えは、「(新聞を)読むことは自分のトクになる。マスメディアは自然のものではなく、人工のもの、支配のためのツールにもなる。マスメディアからはいいこともたくさん得られるけれど、マスメディアを利用した支配には十分注意しなければならない。そのためには、批判的な読者になることが大切」であった。



サイラ・リンナ・ハールメさん

(うえた・まさとし)

「ピステ」を訪問して

山陽小野田市立高千帆中学校教諭 川本 吉治

「ピステ」はフィンランドの首都ヘルシンキの中心部、ヘルシンキ中央駅からほど近い場所に位置する。ここは北欧最大の発行部数（約47万部）を誇るヘルシンギン・サノマツ紙の本社ビル地下2階に広がるマルチメディアセンターである。1999年に建物が完成し、今回われわれの説明役となっていたいただいたパオリナさんのような新聞記者が中心になって来場者に対応して今日に至っている。



「ピステ」の特色は、センター全体がヘルシンキの街角をイメージした小さな町のようにになっていることにある。中高生のグループがこの町で起きた事件を協力して取材し、記事として構成し、発表することで新聞記者の疑似体験ができるようになっている。開設当初は中学生対象の1プログラムのみであったが、現在は中学生向け、高校生向けの複数のプログラムを体験できるようになっている。

今回「ピステ」でわれわれが体験したプログラムは、「行方不明となっていた女子高校生が遺体となって発見された」という実際に身の回りであったらいささかショッキングな事件を取材する内容だった。フィンランド語は全く理解できないが、映像や携帯電話、玄関先のインターホンなど具体的な取材手段が設定され、事実を一つひとつ確認しながら真実に迫っていく過程がリアルに追体験できるようになっている点はわれわれにもよく分かる。

工夫が感じられた点は、グループで手分けをし、取材した内容を持ち寄って討議を経なければ記事が完成しないようにストーリーが練られていることである。伏線が周到に張られ、記事に添える写真も注意深く選ばないと不適切なものを選んでしまう羽目になる。事件の犯人も、綿密に取材をしないと分からないようになっている。

現役の新聞記者が案内人なので、参加者の質問に的確に答えられるところがこの「ピステ」の強みである。普段読んでいる新聞の記事が書かれる裏にはこのような苦労があることを実感できる点でも魅力的な施設である。授業の一環として訪れる年間約7,000人の生徒と教員たちが、日本から来た身にはうらやましく思えた訪問だった。

(かわもと・よしはる)



ヘルシンギン・サノマツ紙

奈良県立桜井高等学校教諭 矢野 佳津

小さなローカル紙が多いことが特徴のフィンランドで、唯一の全国紙がヘルシンギン・サノマツである。紙名のサノマツはフィンランド語の新聞(サノマレヒティ=サノマ・メッセージ、レット・紙)からきている。欧州最大のメディア会社のひとつサノマ・グループの新聞部門サノマ社が担当している。1889年の創立である。以下、マネジング・エディター(編集局長)のアンテロ・ムッカ氏にお話をうかがった。

紙面の特徴は、1面を全面広告用としていること。実際のニュースは3面からになる。朝刊は99%宅配されている。夕刊のイルタ・サノマツはタブロイド判で、宅配はない。経済新聞のタロー・サノマツは現在ウェブ版のみになっている。「ニュート」という若者向けの新聞が毎週発行され、本紙とともに宅配される。他に、フリーペーパーも発行しており、交通機関の中で配られている。

人口500万人に対して、読者は100万人、発行部数は42万部、日曜版は47万部となっている。北欧では最大規模の新聞だが、世界的傾向として、紙の新聞は少しずつ減って、ウェブが伸びてきているという。

地方版というものがなく、全国に同じ版が配られているのも、日本と大きく違う点である。大きなニュースが入った場合には、第2版までは出される。

社の理念は、「中立で政党に偏らないこと」「迅速に信頼性の高い情報を伝えること」であり、読者が自身で情報を見て判断できるようになってもらうことを目的としている。最近の傾向として、地元重視が挙げられる。読者のニーズに合う記事を、読者の観点から書くということである。一般家庭の朝は忙しくなっているため、ゆっくり読めないことが、購読をやめる大きな理由となっている。そのため、より興味深く、よりコンパクトな記事が求められている。

NIE用の新聞は2月のNIE週間には全生徒に1部無料で配られる。定期購読の制度はないが、希望すればいつでも無料でわけてもらえる。新聞は、情報だけでなく、一般知識や民主主義的教養を与えるものである。若者の読者が減らないよう、読み物としての価値を、学校で子どもたちに伝えるためNIEは役立っている。自由に使えるロゴのみの新聞も作っている。

「新聞は将来的に必要で、新聞には将来性があると考えている。今後も、基本は紙の新聞に重点を置くが、ウェブにどれくらいの力を必要とするのが不明である。オンラインと印刷の違いを把握し、特性を生かした情報発信をしていきたい」と話していた。

(やの・かづ)



1面と3面 ログオのみのNIE用新聞



社屋は現代美術館と並び評価の高いモダンな外観

フィンランドの高校「ティックリラ」

長野県松本筑摩高等学校教諭 有賀 久雄

ティックリラ高校はヘルシンキ近郊、人口20万のバンター市にある市立高校。16～20歳までの1,120人の生徒が通うフィンランド最大規模の高校で、情報教育に力を入れた総合高校である。2002年にできた新校舎は、スタジオとステージを持つ300人収容の大教室をはじめ全国一といってよい施設に恵まれている。また大規模校なので、学校設定の情報科目だけで67種類という幅広い講座を開講している（国語、美術、音楽など一般科目の中にも情報教育を組み込んでいる）。

その点日本の単位制総合学科高校に近いが、オレンジのベゴニアの鉢とテーブルセンターに飾られたテーブルが並び、広くて明るいカフェテリアに集う大人っぽい若者を見ると、高校というよりカレッジ（単科大学）という雰囲気为学校だ。

この学校の基本方針は、メディアリテラシー（情報を分析、比較、批判できる力）を身につける、生徒は理論を学ぶだけでなく雑誌・テレビ番組・映画・演劇・照明音響など自分でメディア作品を作る（銀行から提供された3,000ユーロを生徒のCD、DVD作品製作に充てている。また各講座は実際に情報分野で営業している会社や施設と共同で準備されている）。

案内をしてくれたメディア教育と映画担当のアンティ・ペンティカイネン教諭の「ジャーナリズムの基本」講座では、生徒たちがインターネットを使って報道写真を調べていた。2年生のローサさんは、メディア、写真、自己表現、映画など6講座を取り、メディア講座では10人以上のチームで「HÄLY」という雑誌（学校の年間行事をまとめ年3回発行）を作っている。国語と情報通信担当のミラ・トルバネン教諭（女性）の国語の講座では生徒が六つのグループ（雑誌・テレビCM・視聴率・広告・ニュース・ストーリー的報道）に分かれ、何時間か一緒に調べ、皆で発表する形をとっているという。

ところでこの学校ではNIEはどうなっているのか。教員は、気に入った新聞記事を切り抜き紹介する、情報の授業でコラムの比較をよくすると語ってくれた。しかし当の高校生に新聞というメディアについて聞いてみると「重視していない」「重要だとは思いますが（使用頻度が）低い」「通学途中で無料新聞を読むことがある」という答えが返ってきた。

アンティは「当然だろう。いろいろなメディアがあるのだから（新聞を特別視せずに）平等に接することが大切だ」とコメントした。マルチメディアに日々接する彼らだから当然かも知れないが、実はここフィンランドでも若者の新聞離れは進んでいる。2007年調査で週1回以上読む子どもは89%だが、毎日読む子は30%でしかもその割合は急速に減ってきているという。

しかし、フィンランド新聞協会のピリョーリタ・プロさんはいう。「フィンランドで子どもの新聞を読む率が高いのは毎朝、親が新聞を読んでいるから。子どもは親の背中を見て育ち、朝起きたら新聞を読むことを習慣的に学ぶ。そのことを特別意識してこなかったが、子どもたちのPISA型読解力の高さで改めて親たちはその重要性を再認識したのでは」。

社会のあちこちに感じる「ゆとり」。それがフィンランドの成功の秘密ではないだろうか。情報教育に特化した高校で、時代の変化に対応できる子どもを育てようとするフィンランド教育の特徴のひとつを垣間見たとともに、写真など質の高い芸術作品を校内にさりげなく展示し、生徒の感性を刺激する文化度の高さ。また生徒たちの作品をロッカーの上など校内のあちこちに置く。何でも生徒自身に作らせ、飾り、褒めて、自信を持たせる北欧流教育の温かさがこの学校にもあった。真の豊かさ、人間らしさを考えさせられる旅だった。

（あるが・ひさお）

モトウツリ小学校の子どもたち

岡山大学教職大学院（倉敷市立倉敷西小学校教諭）廣田 巨史

学校の概要

28年前に開校。児童数約400人、教職員数約40人。数学・国語科を中心に基本的スキルの習得に力を入れている。言語はフィンランド語。第一外国語として英語、仏語、スウェーデン語、第二外国語も学習している。特別教育の中心は美術教育（メディアも含む）。また環境教育を重視し、環境プログラムを開発。クラスの30%が外国人で難民受け入れのためのクラスも開設。フィンランド語はできるが、マナーなど基本の基本から教える。溶け込むと同様に自国の文化・言語を持ち続けることも大切にし、母語教育も週2時間受けることができる。ロシア、クルド、ソマリア、アルバニア...など7か国の言語を教えている。ヘルシンキ市内には30か国語を教える学校もある。

オンライン新聞作成

コンピューター室でコンピューター担当教員が説明しながら、3人の代表児童が授業の流れをデモンストレーション。日本のNIE事情視察団長の安田先生に対してインタビューをしながらコンピューター上で記事を作成する(写真)。「名前は?」「どこから来たの?」「フィンランドはどうですか?」など。

教育庁が発表しているオンライン新聞「新聞工場」に記事を投稿。中学・高校の参加が多く、小学校は少ない。「新聞工場」には記者の教室コーナーがあり、記事作成について説明。クラスの中で新聞を使うときは、活用することもある。

2007年から軌道に乗りはじめ、生徒会会議で新聞の内容を話し合い、立ち上げた。オンライン新聞名は「ふくろうの郵便」。だれでも参加して記事を作成することができる。

4年生から6年生が対象で記者リストに登録。暗唱番号から編集長に記事を送り、チェックを受け出稿。生徒の興味の内容は、生徒会、写真、美術、物語、クイズ、音楽、投書、ジョーク、マンガ、ゲーム、パーティー、夏休み旅行記など。自信をもって記事を書くことが目標になっている。「インターネットいじめ」の記事を授業で活用したこともある。



学校には毎日、無料で新聞が配達されるが読む生徒は少ない。正式な学校のホームページは教師が管理。学校の環境についての情報や、将来的には、子どもの記事を載せる。新聞を積極的に活用するのは、新聞週間にクラスごとに取り組む時のみで、それ以外はしていない。新聞社ヘルシンギン・サノマットに参加したこともあり、写真や記事を作成。環境保護のため紙は使わない。

学びのスタンス

ヘリシリヤマ校長は、「新聞の構成などは家庭の中ですでに知っているのではないか。大人の世界をヘルシンギン・サノマットで読ませた。マンガからスタートし、文化、スポーツ、編集長のページまで至ればよいが、16歳でもまだ至っていない。自主的な行動を支援するために、環境や条件を整備。『やりたければどうぞ』のスタンス。教育的効果は、自信、自己表現力、他人を尊重。将来のきっかけとなり、写真、記事など幅広い表現活動ができる。日常的にはあまり新聞を使っていない。新聞は教育の中の一つの道具である」と、特別に新聞を使うことを重視していない様子がうかがえた。

雑感

教室の雰囲気から教師と生徒の関係性を垣間見ることができた。日本では失われつつある関係がフィンランドには残っている。しかし、日本が直面している学校教育の諸問題は、近い将来、フィンランドも向き合わざるを得ないことになるであろうと予感した。

(ひろた・まさふみ)

ヘルシンキ市立学校博物館見学

岡山県立西大寺高校教諭 水田 清志

2008年8月29日(金)14:00~16:00 ヘルシンキ市立学校博物館を見学した。入館料は無料であるが、開館期間は5月と夏休みを挟んで9月から12月の5か月間ほどだ。今回は特別に開館してもらった。以前は市民の有志が運営していたが、現在では市が運営している。この博物館は1830年代と1840年代の二棟の木造の建物からできている。教室、教具、写真、コンピューターのデータを展示して、ヘルシンキ市の学校の歴史を説明している。昔の授業体験もできる。入館者のほとんどは市内の生徒と教師だ。ヘルシンキ市役所職員のサウリ・セッパラさん(男性)が昔の教員の服装で案内してくれた。

部屋は年代順に分かれていた。最初の部屋では、教育は教会中心に行われていたことや結婚するには読み書きができないといけないという教会の決まりがあった等の説明があった。1866年には宗教から教育が切り離された。また、1921年にフィンランドで義務教育が始まった。この制度は主にスイスの制度を参考にできた。その当時は、手を使って学ぶことが大切だと教えられた。女子は編み物、男子は家具作りだ。

次に、昔の教室を再現した部屋があった。昔の男子生徒はチョッキを着ており、女子はエプロンを身につけ、男女は別々に着席した。昔の授業体験が始まった。サウリ・セッパラさんが昔の先生になりきり、先生のオルガンに合わせて賛美歌441をみんなで歌った。

次に健康を保つための方法について「生徒」に質問があり、昔の授業と現在の授業の違いの説明があった。昔は厳しかったが今は違う。28年前には文字の形が変わったし、先生に対して丁寧語を使わなくなった。先生中心の授業から生徒中心の授業に変わった。この変化の良い所は生徒が自信を持ったことで、悪いことは教室の中に静けさがなくなったこと。さらに、教師、警察、親の権威がなくなったことだ。フィンランドでは、1914年に体罰が禁止された。しかし、1960年から70年頃まで一般に体罰が行われていた。

フィンランドでは、60年前から学校給食がある。当時は、オートミールとスープが中心で、自分のクラスで食事をしていた。1960年代に入りフォークとナイフが導入された。当時の調理場の再現もあり、大きな鍋も展示してあった。その他として、掛け軸や理科の実験道具、岩石の標本、体操器具や70年前の学校の様子を映した映画をビデオにしたものもあった。

博物館の外に出ると8月と言うのに秋の気配を感じた。この博物館に来ることによって今の生徒中心の授業の功罪を考えさせる機会になっている。手を使って学ぶフィンランドの教育(男子は家具作り、女子の編み物)は、この国のデザインの発展と関係があると思えた。
(みずた・きよし)



昔の女子児童はエプロン姿で学ぶ



昔の授業体験

第10回海外NIE事情視察団視察を終えて

大阪市立野中小学校校長・視察団団長 安田 陽子

第10回海外NIE事情視察を終え、全団員が無事元気に帰国することができました。

この機会を与えていただいた日本新聞教育文化財団をはじめ関係諸機関ならびに多くの方々に感謝申し上げます。

今注目の的であるフィンランドとノルウェーの視察はNIEを実践し、また、教育に携わる者にとっては魅力的で、ぜひ訪れてみたい国であり、教員16名、報道関係4名、財団の吉澤部長の計21名がそれぞれの目的、課題を持って視察に臨んだ。

ノルウェー（オスロ）での2日間は、ヤン・ステーン氏のNIEへの熱き思いが十分に伝わった日々であった。1日目のメディアラボという新聞社の「次世代読者を育てる」という取り組みを見学したが、ジャーナリズムの楽しさを体験する高校生の様子、必死でプログラムに挑戦し実践している様子は圧巻であった。コーディネーターの指示をきちんと受け止め、考え、行動に移すことができる素地が、既にそれぞれに備わっていると感じた。

また、オーモット・ウンダム中学校では、ノーベル平和賞の授賞式で受賞者らを取材し、写真や映像と共に記事をネット上に流すという活動を、中学生が誇らしげに報告するのを鳥肌が立つ思いで聞いた。

国の、子どもを育てるという思いが、メディアと教育の共通のものであることを実感し、ノルウェーの教育の土台の層の厚さを感じ取った。そして、ヤン氏のコーディネーターとしての役割を新聞社もきちんと受け止めており、そのことがどの場面においても伝わってきた。また、NIEの実践の場である小・中学校においてもヤン氏の役割は偉大であった。

ノルウェー最後の日の午後、ヤン氏の実家である農場でのティータイム。ノルウェーの家庭の古き良き伝統を見せていただくといううれしいサプライズがあり、心安らぐひとときであった。

フィンランド（ヘルシンキ）での2日間は、日本への留学経験のあるペトリ・ニエメラ氏の通訳でスタートした。新聞博物館、マルチメディアセンター、専門学校・小学校等多くの施設や学校を視察したが全てに共通することは、家庭に新聞があり、幼い時から常に身近に新聞があるという状況と、「自分のために学習する」ことを子どもたちが理解していることであった。このことは、マートゥリ小学校で逆に取材を受け、それがすぐにパソコンで入力され、われわれの前でネット新聞が完成したことで十分伝わってきた。

ヘルシンキでガイドをしている日本人女性の言葉で心に残ったのは、「特別なことはしていない。できない子をつくらないだけ」。この発言は、この後の見学にすべて当てはまっていた。国を挙げ、子どもが主役である教育を実践している。その中に新聞があったように感じた。

PISAの結果を見て、親が「もっと新聞を読まなくては……」と思ったそうであるが、「わが子を学校に通わせているが、特別なことをしているとは思っていない。ただ、底辺の子どもをつくらないという学校の教育方針はしっかり伝わってくるし、家庭も協力している」。

日本で何が出来るか。NIEで身につけさせる「生きる力」が「わからない」という子をつくらないように、「もっとわかりたい」という子をつくれるようにさらに研さんを積みたい。有意義な研修であったと確信する。すべてに感謝。

(やすだ・ようこ)